



Title	日本のヒグマの生息状況 : 生物学的特徴 : 分類と形態
Author(s)	大館, 智氏; 釣賀, 一二三
Citation	アジアのクマ達 : その現状と未来, ISBN:4-9903230-1-7, pp.109-110
Issue Date	2007
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44442
Type	bookchapter
Note	第16章 日本のクマ類の現状 : 16.1 日本のヒグマの生息状況 / 間野勉 (編)
File Information	JBN2007-065.pdf



[Instructions for use](#)

第16章 日本のクマ類の現状

16.1 日本のヒグマの生息状況

間野 勉 (編)

北海道環境科学研究センター自然環境部

は、3頭の成獣メス(6~7歳)の平均体重は104.7kg (SD = 6.4)であった(佐藤ほか 2004)。また北海道東部の知床半島におけるメス成獣の平均体重は102.9kg (n = 31)、オス成獣は192.4kg (n = 7)であった(小平ほか 2006)。なお、地域ごとに用いた捕獲用罠の大きさが異なるため、捕獲される個体の大きさに偏りが生じている可能性があることを考慮する必要がある。実測による野生個体の体重の最大記録は、2002年11月に知床の斜里町において捕殺されたオスの成獣で、400kgであった(仲村 2003)。これはのぼりべつクマ牧場の飼育個体におけるオス成獣の最大記録、440kg (Maeda and Ohdachi 1994)と較べても遜色のない大きさである。体長、首廻り、胸回り、前掌幅、後足長など、体重以外の外部計測値については、報告例はわずかしかない(例えば、北海道環境科学研究センター 2004b、佐藤ほか 2004)。以上のように野外で捕獲された北海道産ヒグマの外部計測値の地理、年齢、季節、性による変異などに関する体系的な報告はなされておらず、今後の課題となっている。

のぼりべつクマ牧場における飼育下のヒグマにおけるオス成獣の最大記録は440kgで、メス成獣のそれは221kgである(Maeda and Ohdachi 1994)。もっともサンプル数の多い4~6歳の年齢クラスでは、メスの平均体重が115.0kg、オスは219.0kgであり、他の成獣の年齢クラスにおいても、オスはメスの約2倍弱の体重であった。外部計測値のうち、胸回りは体重と強い正の相関があり、体重の指標として有効であった。また、前掌の幅に関しては、成獣オス(4歳以上)と、メス(1歳以上)および若いオス(1~3歳)は、13.5cmを境に9.3%の誤差で区別できることがわかった(Maeda and Ohdachi 1994)。

北海道において、ヒグマの頭骨サイズ(基底長)は南西部から北東部に向かって増加することが知られている(米田・阿部 1976; Ohdachi et al. 1992)。北海道のヒグマは5日間で70kmを移動した例が報告されており(早稲田 1999)、北海道の大きさ(約78,400km²)を考えると、このような形態の明瞭な地域差が存在することは興味深い現象である。

後述するように、Matsuhashi et al. (1999)は、北海道内

生物学的特徴

分類と形態

北東ユーラシア地域のヒグマは、頭骨や歯の形態に基づいて4亜種に分類されている(Baryshnikov et al. 2004)。北海道産(南千島を含む)のヒグマは *Ursus a. ferus* Temminck, 1842 (しばしば使用される *U. a. yesoensis* Lydekker, 1897 は新参同物異名)、近隣の樺太(サハリン)とロシア沿海地方に生息するものは *U. a. beringianus* Stroganov, 1962として分類され、別亜種として扱われている。一般に、北海道産亜種は北東ユーラシア産の他の3亜種よりも小型である(Baryshnikov et al. 2004)。

北海道産のヒグマは、世界の他の地域に生息しているものと同様に背中には盛り上がった部分があり、体色は黒ないし茶褐色、あるいは明るい黄褐色(金毛)である。顔から背中にかけての部分のみが金毛あるいは茶褐色のものもみられ、中には胸に白いツキノワ模様のある個体も存在する(今泉 1960)。

野外で捕獲された北海道産ヒグマの外部形態に関する計測値の報告例はわずかである。北海道南部の渡島半島における生け捕り個体の例では、メスの平均体重は81.7kg (n = 17, SD = 17.2)、オスは127.6kg (n = 8, SD = 33.9)であった(北海道環境科学研究センター 2004a)。北海道中央部の東に位置する浦幌町における生け捕り個体の例で

のヒグマのミトコンドリアのコントロール領域に3つのハプロタイプがあり、それぞれ南部（石狩低地帯以南）、中央部（石狩低地帯以東、釧路地域から道北地域）、東部（知床半島から阿寒地域）に偏在していることを明らかにした。Baryshnikov et al. (2004) は、これらの3つのハプロタイプ間で頭骨と歯の形態の比較を行った。その結果、南部のヒグマは小さく東部のものは大きいことがわかった。とりわけ東部の個体（国後、択捉島産のものを含む）は中央部や南部のものよりも有意に大きく、臼歯が小さく、幅広い顔面を持っていた。この研究により北海道内の頭骨形態の地理的変異には遺伝的な背景がある可能性が高くなった。

北海道内における頭骨形態の地理的変異の要因の一つとして Baryshnikov et al. (2004) は食物条件の違いを示唆した。一般的に食肉性のクマ類は雑食性や草食性のクマよりも小さい臼歯を持つ傾向がある（ただし食虫性のものよりも大きい）(Sacco and Van Valkenburgh 2004)。広い顔面と小さい臼歯を持つヒグマが生息する北海道東部地域では、大量のサケ・マスが河川に遡上する。また近年、この地域ではエゾシカ (*Cervus nippon*) の肉が重要な餌資源となっている (Sato et al. 2004, 2005a)。ただし、ヒグマの食物メニューは数十年の間でさえ大きく変動することが知られており (Ohdachi and Aoi 1987; Sato et al. 2004, 2005b)、食性の違いが形態の変異をもたらした要因であるかどうかの結論は容易に出せるものではない。北海道産ヒグマの頭骨形態の変異の進化的意味については今後、再検討を要する。

(大館智氏, 釣賀一二三)